1998年

『武道伝来記』論 ―巻一の構成―

佐々木昭夫

On “Budodenraiki”

Akio SASAKI

Abstract

Ihara Saikaku’s “Budodenraiki” is consisted of thirty-two short stories all concerning the deeds of worriors of the recent age : the vendetta and others. In regard to theme all stories resemble but they distinctly differ from each other in many respect : the style, the technique, the viewpoint and others. At first sight even the author’s thoughts seem to be various.

In this paper, I examined the first four stories of volume 1 and found that they are carefully put in this order by the author’s intention to manipulate the reader’s interest.

In the first story “Shinteiohikubiwanoumi” the astonishing valour of four boys is described clearly. According to its somewhat legendary and unfounded character readers do not judge its ethical meaning. We find the second story “Dokuyakuwahakoirinoinoti” a very different tale from the first. It gives us an impression of even a long chronicle. By the roughness and fineness of description those eleven pages can represent a very long lapse of time. There is painted a cruel act but we readers do not blame it for it was done by a virtuous and valiant warrior. In the third story “Monomodoretoiuniwakashogatu”, an absurd and traditional deed of warriors is depicted and its absurdity is shown clearly by contrast with a suicide of a concubine. When we readers recognize in the third story that there is much absurdity in the warriors’ morals, we immediately look back to the previous two stories and the cruelty of the second story becomes really inadmissible. We find even the value of valorous act of the first story somehow questionable. But in the fourth story, the last of volume one, Saikaku shows and convinces us that in the morals and deeds of warriors there are some few undeniable human virtues.

東京家政学院筑波女子大紀要第２集　〇～〇ページ

一

『武道伝来記』の三十二話は、一話一話がそれぞれかなり違っている。まるで作者西鶴の人間観自体が一話一話で異なっているかに思え、我々読者は最初とまどいを禁じ得ない。しかし丹念に読み込むと、作品に描かれた様々な同時代の武士の姿に対する作者の倫理的態度は、極めて精妙ながら何か確固たるものがあり、それは作者の人間精神の底知れぬ深みにまで透徹する眼―すなわち人間観察のこの上ない正確さと表裏一体をなすことがわかる。それよりも捉えにくいのは、三十二篇の一篇一篇の作品自体に対する作者の態度が様々に異なっていることである。みずからの描き出す世界に対しあくまで冷静である場合もあれば、作者いや語り手が作中人物への怒り、賛美、恨み等様々な人間的な態度を取り、それがあからさまに作品の表面に出ている場合もたくみに隠されている場合も、隠しきれていないと思われる場合もある。西鶴の場合には作品の表面に言葉であらわされた評価が必ずしも作者の本心を示すものではないことが多い。例えば「天晴はたらき残る所なし。」「武勇此時國中に其名をあげける。」といったためでたく喜ばしい言葉が書かれているからといって作者西鶴自身がどの程度めでたいと思っているのか、真底からそう思っているのか口先だけなのか、それは千差万別である。要するに作者は主観の表出を極力抑えているのではないか、淡々と書いているときも大変な努力の結果ではないかと感じざるを得ない場合も多いのだ。読者は勝手読みの愚に陥ることを避けるためには一話ごとに細心の読みが必要である。そのような面倒はやめ、ただ作品の指示する通りに受けとればよい、少なくとも同時代の読者は無頓着であった一面もっと素朴で素直だったのではないか、とするのはどうも西鶴の場合には適当ではないように思える。少数の注意深い読者にだけ読み取ってもらえばよい、そう考えたとしか考えられない箇所が時折目につく。それが同時代の現実の読者層の一部に存在したのか、そんなあてなぞ全くなく、いわば後世をたのみとしたのか、それはここでは問わない。

一話ごとの多様性は各話の文芸的価値にまで及んでいる。古典作品の優劣を言うのははやらないらしいが、敢えて言えば『武道伝来記』は三十二話一つ一つを取り出せば、その点でも様々である。そして少なくとも、話の内容に賛嘆から共感、疑問、冷笑、怒り、その他何であれ作者自身の情念的主観が強くこめられ表にあらわれたり極力かくされたりし、表現に工夫を凝らし、それがうまくいっている場合は、そのたいていが一話として優れていると言ってよいだろう。この点には三十二話の多くに触れたあとで戻ろう。

混乱し矛盾してさえいるかに見える『武道伝来記』の構成について西島孜哉氏は成立論から説明されている。[1] 執筆が同時進行中の二つの作品を急遽一つにしたことから生じる混乱、不統一という見方には説得力はあるが、たとえそうではあってもこの形にまとめたとき、やはり西鶴にはそうまとめる上でそれなりの創作意識もあったように感じざるを得ず、特に最初の巻一にはそれがはっきりうかがわれるように思われる。そこで本稿は巻一がどのような巻であるかを順次一話づつ見てゆく。

二

巻一の第一「心底を弾琵琶の海」はいかにも全三十二話の成す膨大な一編の冒頭に置かれるにふさわしい。書き出しの一文

武士は人の鑑山くもらぬ御代は久かたの松の春　千鶴万亀のす

める江州の時津海。風絶て浪に移ふ安土の城下はむかしになりぬ。

は例によって、松平、つまり徳川の治政の繁栄を寿ぎながらそのまま、波静かな琵琶湖の様子と、この一話が安土城が湖に姿を映していた過去の時代を舞台とすることを告げる。諸国咄的に多くの話を集めた西鶴の浮世草子で、冒頭の一話でこの湖つまり近江の国が舞台になることはなく、むしろ中央部分に来ることが多いが、ここでは悠然と始まる書き出しの一文は、この一話のみならず、今から一篇の巨大な長篇が開始される事を告げているかのようである。すぐに「其比平尾修理といへる人」と本話の主人公の紹介に移るが、これも「天武天皇の末裔にして高家なれば。」とこの人物自体が、高家としてきわめて古い過去を背後に持つ設定だから、人物の説明文そのものがこの一話の悠々たる叙述の歩みにうまく適合している。そして琵琶湖に舞台を設定したため、仏道の修行に励む人物の心境が現実の湖の光景に託され、仏教用語を多用して表現され「生死目前の湖是則弘誓の丸木船。一大事踏はづしては有べからずと。観念の南窓に。」、また采女、左京の二人が蓑笠の姿で小舟に乗り琵琶、琴をかきならしながら月の夜庵室のうしろにまわるという行為が、際立った美文調で書かれることが可能となった。「旅鳫心あらば其声にして此歎きつげよ　掛浪の玉には濡ぬ四つの袖。」美文調の頂点が眼夢が琴にあわせて歌ったという「歌台暖響春光融〻。舞殿冷袖風雨凄〻。」の杜牧の一節の引用と言えるだろう。

　このような美文が一話の前半部を占めるのはこの一話がこのような舞台で、このような筋立てによって成っていることから必然的に思えるが、三十二話中の第一話としてもやはり極めてふさわしいとも言える。全体がもっと短く、十話かせいぜい二十話だったならば、この一話を中央部分に置いたとしても構わなかったろう。一話一話がいかに多様で区々様々であったにしても、全体をふり返るときの読者の関心にあって、単なるその中の一つとして影が薄くなってしまうこともあるまい。ところが三十二話という数になると、その冒頭に置かれるということは、もっと少ない場合に比べ、それだけで強い印象を読者に与えることになり、一方逆にあまりにも謎めいていたり、深刻、悲劇的、その他強い個性を感じさせる一話であってもならないだろう。

　この一篇の愁いを含んだ悠々たる進行はほぼ中央に置かれた眼夢の怒声から一変する。

おのれら爰に来れる者にあらず。年月我をそむき前後わきまへぬ非道。其数かさなって須弥山にもあまれり。然れどもゆくすゑ此姿の願ひあれば。日比の情にそれをとがめず。まったく対面正八幡も照覧あれ。七生までの勘当とあらけなく仰せければ

　美文調はそのあとの「帰る浪のうちふして。」の一句にわずかに名残りを見せるだけで一切無くなってしまう。湖畔の庵室に変装した二人が舟で近づくという場面がその風景の風流さもあって、あのような書き方が可能となっていたわけである。ところでこの眼夢入道の怒声はこの一話の登場人物全員に通じるある性格をはっきりと示している。「心底を弾琵琶の海」では、登場人物がすべてきわめて明確にくっきりと描かれ、行動と心理が一致しているから、行動からその裏にある複雑微妙な精神の動きがなんとかうかがわれるといったことは全くない。きわめてわかりやすい、人物すべてが一見非現実的なほど単純に書かれた一篇である。

　眼夢は小船で自分の庵室の前に現れた二人が采女、左京だと知ったとき、「取みださせ給ひ」つまり心の動揺があったからこそ、嘘も

方便と「年月我をそむき前後わきまへぬ非道」など怒って見せた言葉がこの上なく荒っぽくなったに違いないが、それにしてもこの眼夢の言葉はきびしい。二人に追腹ならぬ先腹を切らせることになるだけの強さを持たなければならないのだ。刺しちがえる若者二人の行為もはなはだ明快であり、疑念をよぶ点なぞ全く無い。それに対する眼夢の行為はきわめて自然だがどこか笑いをさそう面がある。それを西鶴が意図したのは否定できないように思われる。

　此事眼夢に申あぐれば御せいごんもわすれさせ給ひ。やう〳〵庵室をはなれさせ給ふに。御足立せ給はぬを人〻肩にかけ屋かたにうつしければ。此有さまに取りみださせ給ひ。

　誓言を守りきることをあんなに強くめざしていたのに、と思う必要はない。これはきわめて当然の結果と言えるだろう。眼夢のショックはそれほどひどかったのだから。しかしここで、作者の宗教心の皆無なことは感じられ、やはり作者西鶴の冷笑は厳存する。「老足なれ共此道は追付べし」左京の脇差を腹につき立てようとし、世の評判を気にする家来たちに無理矢理とどめられる次第。さらに「是より御心もつかれさせ給ひ三日も立ぬに御命かぎりとなり。」にも笑いがあるが、それは采女、左京二人の若者の行動があまりにも立派で一点の非の打ちどころなく、いわば直線的だったから、それと対比されて眼夢の姿が、最初の仏道修行の志以後すべてある滑稽さを帯び、若者二人に比べて一段も二段も劣った日常的、常識的なものとなるからである。

　そのあとで出てくる関屋為右衛門も、いつの世にも存在する中年の男で、卑劣きわまりない俗物性ははじめは左京と、左京の死後は采女弟求馬との対比でこれも明確に鮮やかに描かれている。眼夢への冷笑を含んだ眼差とは違い、はっきりした悪人の為右衛門には語り手の主観が露である。左京に恋文を送り、はじめは左京も為右衛門の恋心を思いやってひそかに「主命そむく事ぞんじもよらず」ときっぱりと言ってきかせたのにきかないので「外にも聞人の座にて。為右衛門一分立ぬ程に返事申きれば。中〳〵いきては堪忍ならぬ所を日比の大胆とは違ひ。おめ〳〵と其通りに済しけるが。」というのは、侮蔑、嫌悪がはっきり現れた文だが、このような人物には語り手がそうした主観の表に出た書き方をするのはむしろ当然で自然なように思われる。

　それにしても左京死後「此たび左京は命を惜み主人御恨みあれば暇乞すて他国といふを采女引とゞめ。申かはせし通り是非さし違へて二世の同道と。義理にせめられいたい腹を切けると申なしぬ。」とつくり話をこしらえ、自分がかつて執心していた左京の名誉を汚すという卑劣さには驚くが、「国中に此さたさせける事人倫にはあらず。」というから、それを信じた人間もずいぶんいたのだろう。むしろ為右衛門の嘘言は、大多数の人々に、いかにもそうありそうな事と感じられる点を持っていたのだ。西鶴は大衆の愚かさをよく知っていて、この作品の読者の中にも、采女、左京は全く違いなく書かれ、死に顔さえ「二人ながら中眼にひらき笑へる白ばせ」と書かれていたのを忘れ為右衛門の嘘言に或るレアリテを感じる読者がいそうだ、なにしろ全く同一な二人の青年などあり得ないと考える者は多いだろうからと考えたに違いない。だから采女の弟求馬の言葉は「左京采女いづれかあひおとるべき心底にあらず。」の語に続いて「然も左京は采女にまされるの所ありて。」と全く矛盾したことを言う。これは外面的には自分の兄のことを少しへりくだって言っている言葉だが、むしろ作者が、そうすることによって左京、采女の対等性等価性を読者の心理のうちに確認しようとしているのではないか。くり

返すが、いくらとんでもない嘘言と知っていても、いかにもありそうな話と一瞬感じてしまった読者は、やはり二人の行為の主導者はどちらかと言えば采女で左京は後からついていくことが多かったのではないか、といつの間にか信じ込んでしまうかもしれない。その場合求馬の「左京は采女にまされるの所ありて」の語は、読者の無意識のうちに左京を采女と対等の高さに引き上げる。これは結構効果的な手法なのだ。

為右衛門の姿は、卑劣という以上にその俗物性が強く読者を打つ。

有時森坂采女が弟求馬といふ人の一座にて為右衛門左京事を又噂して若道にも各別の違ひありと其の座なるに采女事を言葉ある程つくしてほめければ。

為右衛門がここに求馬がいることを知っていたのは「其座なるに」の一語で示される。つまり為右衛門が声高に采女を褒め立てているのはその弟の求馬に聞かせようとしたのだ。求馬が当然喜ぶだろうと思ったのだろう。まさに度し難い愚劣な俗物根性である。求馬の言葉は当然である。

求馬よく〳〵聞届け。是は為右衛門殿には無用の御褒美。左京采女いづれかあひおとるべき心底にあらず。然も左京は采女にまされるの所ありて。すこしも人におくるゝ若衆にあらず。其上そなたにも傍輩の事今になってよしなき流布せらるゝ事天命しらずなり。大勢の中にして露顕のうへなればかさねて申さぬとはいはせじ。此事左京弟左膳にしらせて正八幡も御じげんあれ。其身のがさじといへば。

これまたきわめて注意深く子供が大人を打ち取るという異常事態が納得いくように書かれている。最初から相手を許すまじとの決意を秘めた恐ろしい言葉だが、それと同時に決して一直線に高まるのではなく、「然も左京は采女にまされるの所ありて」云々のあたりでは一旦舌鋒がややゆるみ、すぐその後の「其上そなたにも」からまた急激に高まって「申さぬとはいはせじ。・・・・・其身のがさじ」と二段に構えて速度と勢いを増し最高潮に達する。このように相手を追いつめ断罪する言葉が絶頂に達した瞬間に「求馬天理をもってうつ太刀はやく車に切はなち。」と白刃が一旋するという書き方は、直後の「静に鞘におさめて立出るを」と共に、文の勢い、その緩急の運動が一分の隙もない剣士の技に一致するかに感じさせる手法である。これがうまくいくためには相手を追い詰めてゆく長広舌がその過不足ない長さも含めて、細心の注意を払って書かれていなければならない。西鶴の文の力を認識すべきだろう。

采女に求馬という弟がいたことはここで初めて知らされる「有時森坂采女が弟求馬といふ人の一座にて。」。左膳に到っては求馬の為右衛門弾劾のせりふの最後で初めて出てくる。しかし求馬、左膳は兄の采女、左京に比べてこの一話中でその重要性が劣るとは考えられない。求馬、左膳は采女、左京の直線的で過激な武士道的性格を、一段と過激に明確に示している。采女、左京は主人眼夢へのひたむきな忠誠心を最後まで貫こうと（往年の男色者の心情には理解しにくい点が多いが、ここではやはりそれよりも忠誠心を重視すべきだろう。西鶴もわざわざ「色ばかりには非ず。」と書いている）、先腹切るという激越な行為に出ることによって眼夢の命を奪う結果となり、求馬は為右衛門を一瞬にして切り倒し、左膳は次郎九郎を切り伏せる。少年四人の行為はいかにも過激、かつ弟どもの行為には「求馬は鬢鏡取出し姿を移して。黒髪撫付てゐながら見物をしける。」

や「二人一家をつれて成程いそがず丹波路に入ける。」のように、わざとらしい大胆不敵さがある。眼夢、為右衛門を代表とする大人たちとはまるで違い、大人の世代を完全に圧倒している。眼夢、為右衛門はいかにも情けない姿を示し、その他の大人も求馬が為右衛門を斬り倒した時のように「いづれも廃妄して是をとゞむる人なし。」であったり、次郎九郎の家来のように「此勢ひに下〻あさましくにげかへりぬ。」のいくじない様子が強調されている。

末尾に到って、それまで為右衛門という卑劣漢によって不快な気分が立ちこめていたのを若者が一刀のもとに解決する。左膳は求馬のかげに隠れてしまいあまりはっきりしないが、采女、左京からの類推があるから読者は常に弟連中も二人一体と感じている。この一話の真のヒーローはこの弟二人とさえ言える。序で為朝や弁慶、朝比奈、景清などの名が出てくる。「これらは見ぬ世の事」と言っているが、このままでは豪傑談を期待した読者を裏切ることになるため、冒頭の一話にはほとんど伝説的とも言える豪胆ぶりを示した求馬、左膳を置き、締めくくったのだろう。十代の半ばにも達しない少年には、恐怖心なぞ存在せず、平気で恐るべき行為に出ることもよくあるが、それにしてもこの一話の若者、とくにより年少の二人は非現実的の感さえ否定できない。西鶴は巻一の第一では大人と若者のあり方を截然と分け人物を極めて骨太に明確に描ききり、また読者に強くしつこい読後感のなにも残らぬ一話を置いたのだ。それが冒頭にあるべき必然性は第二第三を見た上で明らかになろう。

三

巻一の第二「毒薬は箱入の命」でまず驚くのはこの僅か数丁の一話がまことに長大なまるで年代記的と言えるほどの時間の重さを持っていることである。市丸成長後にまで筆が及んでいる上に、最後に置かれた森之丞、市丸両名による敵討成功談は、いかに簡潔に書かれていようと、この一話に長い時間の重さを与えるために重要な役割を果たしている。それを忘れてはなるまい。この挿話は諸国敵討の副題にふさわしくこの一話を敵討話に仕立てるためにのみ付加されたのではない。しかも敵討の成功で一篇が終結するのではなく、末尾が「なを筑波根のはたらきの後いよ〳〵恋ぞつもりける。」と以後に続くような形になっているのもその効果を強めている。第一「心底を弾琵琶の海」があのように完全に終結している形だから、第二話は話としても十数年を閲し、話が終ったあとも時間は依然として続いていく印象が必要だったのだろう。一、二話ともにきれいに終結する書き方だったら、両話とも以後に長く続く三十二話の全体から切り離されてしまったろう。

叙述の密度の極端な差、精しく描写すべき場面の選び方、叙述に当たって何を取り何を捨てるか、それがこれだけの短い一話が出来事をこれだけの時間の重みを持ったまま表現するという奇蹟を成し遂げた。この一話では描かれている事件そのものの進行と、読者がそれを読むのに要する時間がほぼ一致する箇所は二度ある。豕の夜の、野沢の姿に形部がふと心をひかれる場面と、二月の末の花畠で小梅の弟九蔵が形部をねらって失敗し、赤児市丸をさらって米蔵のうちにかけ込む突発事件の二箇所である。両者とも狭い意味での描写における西鶴の筆力を示す。描写自体が伝来記三十二話中そう何十箇所も見られるものではない。もっともその特質はそれだけが一話の価値を高めるものとは限らない。前に見た巻一の第一では采女左京の二人が小舟に乗って眼夢の庵の裏にまわる箇所と、求馬が為右衛門を問いつめ斬り倒す箇所の二箇所で、いずれも人物の性格が骨太にこの上なく的確に捉えられてはいたが、あまりに詩的な美文

調だったり、形式が整い過ぎたりし、そのため現実味がやや希薄だった。それに比べてこの「毒薬は箱入の命」ではほとんど天上的でさえあった前話の世界に比べ、極めて現実的であり、最初の豕の夜の場面は日常的でさえあり、菊畠の場面は、現実には稀な異常事態であろうとも、それが突発した背景はありふれた早春ののどかな夕べだった。両者を見てゆく。

素人芸の物まね引語りの浄るり何の面白き事もなかりけり。義理誉に夜をふかしひとり〳〵座敷を立。男は旦那ばかりにして女中は耳の役目に聞ぬれば。道行の中程よりしらけて三味線すてゝやめける。其跡は俄に淋しく成て東のかたの書院に出給へば宵は月を見しに空定めなく時雨て軒の松無用の嵐をおとづれ瑠璃灯のゆらぐを。誰かははづせとありしに。野沢といへる女かいどりまへして。御意にしたがひこの灯をおろし立帰る面影何ともなくしめやかに悪からぬ身振。東そだちの女には稀なるやうに御心うつりて。後帯のはしをとらへて我にいふ事ありと口ばやに仰せられしを聞捨てににげ行けるが。

「何の面白き事もなかりけり。」というのは主人の形部が妻を亡くして幾月もたつというのに未だに忘れかねて沈みがちだからで、「三味線すてゝやめける。」と、もはや一家中ひたすら悲嘆にくれているというわけでもないが、彼らが囲む心中に大きな空虚をかかえた人物としての形部の姿が読む者に伝わってくる。「其跡は俄に淋しく成て」と音曲が停止したときのなんとも微妙なしらじらしさがこの上なく巧みに表現されている。この夜野沢に代って小梅が形部の座敷に行ったとき、「折ふしよく此女もうつくしげに見えて。」が何の不自然さも感じさせないのも読者が形部の言うに言われぬ精神状態をちゃんと納得しているからである。それに比べれば菊畠での事件は緊迫しているだけに描き出しやすいのかもしれない。

明る年の二月のすゑに。花畠の菊植かへらるゝとて。中間壱人つれられ萩垣の外に出られしを見届け。此のときうたずは又の時節もあらじと手ばしかくくだんの刀を取出し。しのびてうしろに立まはり。名乗もかけず打太刀夕日にうつりてかゝやく影におどろきよげたまへば。すまたへ切付し間に脇指ぬきあはせ打つけられしに。鬢先切れながらかなはじとやにげて出しが。折ふし市丸殿御乳の人抱き参らせ広庭に出しをうばひ取。ひっさげて米蔵のうちにかけ込。・・・・・

後から無言でいきなり切りつけられたのに、夕日が太刀に映ったのが見えたのでさっと身を引いて助かったという。背後でひらめいた刀は目で見るわけにもいくまい。殺気を感じて瞬間的によけたということか。そのような極めて微妙でとらえどころのない、瞬時に強く感じられるだけのものがここでは極度の緊張を高めるものとして描写されている。豕の夜のしらけて俄に淋しい様子とはまるで違った感覚だが、とらえどころが無いのに鮮烈に訴える感覚を的確にとらえて表現している点、一脈相通じるものがある。いずれもその場にいなければ感じられない筈の感覚であり、それが表出されたときテクストにはこれ以上ない実感が産み出される。「三味線すてゝやめける。其跡は俄に淋しく成て」「名乗もかけず打太刀夕日にうつりてかゝやく影におどろきよげたまへば。」の二句、豕の夜の場面では聴覚、菊畠では視覚と言えるが、前者は音曲という価値と意味のある感覚が止んだあとの、沈黙静寂にも劣るただ風が出たりしてざわざわした散文的なあたりの雰囲気の与える空しさに近い淋しさ。

もう悲痛で高揚した悲しみは過ぎてしまった後の空虚さという微妙な心的状況が共感され、後者は視覚と言っても現実に目にしたのかも定かではない、あまりにも短い時間に感じられた映像によって瞬時に高められた極度の緊張が伝えられる。心情と結びついた聴覚視覚が実感されるとき印象は極めて強い。

またこれらの二つの句はそれぞれの場面のはじめの方に置かれているが読者に否応なく実感を持たせる力は二場面の最後まで持続する。「此帯縁のむすびとなってちよろりと人の恋をぬすみける。」「跡にて九蔵は切くだかれ形は当座になかりき」までである。その持続はあまりにも強い吸引力の句で読者の意識がそれぞれの場面にしっくりと取り込まれてしまっているからであろう。また二句はそれぞれの場面の季節や天候などを「夕日にうつりて」のように内に含んだり、「俄に淋しく成て東のかたの書院に出給へば宵は月を見しに空定めなく時雨て」のようにそれを現わす言葉をすぐ引き出したりしている。これもこのように事件に適合している場合は実感、そして記憶の働きに効果的である。

西鶴はこのようなおのれの描写の筆力を所かまわずくり広げて見せてくれるわけではない。ぜひ必要と判断した場合にのみ、と考えるべきである。「毒薬は箱入の命」ではこの二度だけで、あとは最初の形部の妻を亡くした悲しみも、小梅の嗔恚も、大量殺人も、九蔵の苦労も、成長した市丸と森之丞のいきさつも、敵討もみなもっと粗く書かれている。粗密の度は何段階にも分かれ、その結果としてこのようなわずかな丁数、語数で描かれることが可能になっている。もし、どこでもいいがあれほどの実感をもって書かれた場面がもう一箇所でもあったならば、この一話は統一感をすっかり失ってしまい、他にも多くの場面をつけ加えねばならなくなったろう。果ては何十巻もの長さに仕上げ、読者が読むに費やす時間と疲労を利用しなければならなくなったろう。作者の禁欲が話に統一をもたらし統一があるからこそこの短い一話で年代記的長さと重さが、表現されるのだ。

ここで角度を変えて登場人物から見ていくと主人公は非の打ちどころのない立派な侍として書かれている。

むかしの人の家の紋橘山形部とて。奥州福島にて出頭此ひとり殿の御心底我物にして。御機嫌よろしければ栄花の時をえて。武士の冥加にかなひ一家中此人に思ひ付事御威光ばかりにあらず。其身更に悪心なく智仁勇のかねそなはりし人。今年廿五にしてなを行末頼母子。

藩主に気に入られて出頭を重ねるというのは『武道伝来記』三十二話中大勢登場するが、いくら有能だったとしても、程度の差こそあれ皆殿の威光をかさに着て我侭を振舞う姿が描かれている。このように一家中に深く信頼されている人物はいず、きわめて特異である。有能この上ない男だがそればかりではなく「其身更に悪心なく智仁勇のかねそなはりし人。」であり、しかも重大なことは皆にその事が知られているという点である。若くして高い人格の力が表にも現われ、同僚の侍たちも皆形部を信頼せずにはいられないという存在である。主人公形部は徳高く人望の厚い人物と設定され「人はありて人なし形部諸事の取まはしまねもならざる侍なり。」とくり返し強調されてはいるが、読者にはきわめて人間味あふれる青年の姿を見せる。妻を失ってひたすら嘆き悲しむ姿、あの冢の夜にせっかく野沢に心魅かれながら、遠慮もなく近づいてきた小梅と出来てしまい、小梅の根性の悪いことが分かるとまた野沢に移り、そして野沢の命をねらった小梅の毒菓子で七人の女房たちが一斉に殺されたとき

「此科の果す所牛割にしてもあきたらずと。」と考えられる限りの残酷な方法で処刑する。その折々の形部はすべて作者によって完全に肯定されている。

小梅は悪女として書かれている。というより『武道伝来記』一番の悪女だろう。はっきり憎むべき悪女として書かれているのは小梅だけか。巻五の第二「吟味は奥嶋の袴」の女中頭野沢はあまりに端役だし、巻四の第四「踊の中の似世姿」の女は、小間物売小兵衛と密通していたとすれば悪女だがそれははっきりしない。巻六の第一「女の作れる男文字」の薄雲のにせ手紙は一橋受難の動機になったことは否定できないが、真の原因であったかどうか大いに疑問である。小梅をしのぐ悪女はいないと言える。何人もの同僚を巻添えにしたのは軽率だったかも知れないが、野沢への殺意は何とも否定できない。また、七人の女性は散々苦しんで死んでいった。西鶴の時代には七人という数、それだけの死の苦しみがあれば出来るだけ殺人者を苦しめて殺すのが正義だったという事もあるだろう。十一日間もかかって少しずつ苦しめて殺すという処刑法の残酷さは我々を驚かすが、作者にはこの一話の表題ともなったこの処刑法への疑問は全く書かれていない。「人の命もつよし」と絶命まで長い日数を要したことに感嘆するばかりである。この小梅その弟の九蔵に対しては語り手の憎しみ、いやむしろ嫌悪感は明らかである。「小梅といへる女お座敷に行て野沢どのゝ帯を御かへしあそばされませいと。ひろき口をすぼめて遠慮もなくちかくよれば。」と最初から偏見を持っているのではないかと思われる書き方である。しかし形部が不意に野沢に関心を持ったことから、男心の機微を読み取りその心中にある空虚さを利用し、愚図々々している野沢に代わろうとし、首尾よく成功した「ちょろりと人の恋をぬすみける。」。だから初めから腹黒い行為とも言える。

姉のことを耳にして形部を討とうと決心する九蔵の内面については何も書かれない。「此事聞て姉が科の程は外になして莵　角かたきは主人形部と思ひ定め」だけである。「心をくだきねらひぬれ共たよるべき首尾なくて程ふりけるこそ口おしけれ。」は一瞬九蔵の心情に共感させるが、行動の大義を承認させられるわけではない。赤児の市丸を人質に米蔵にたてこもったとき、「其断りも聞わかばこそ又其まゝにころしもせず。おのれのがるべき所にあらず。天命つきて待ける所に」とある。その「おのれのがるべき所にあらず」の一句は語り手の九蔵への憎悪が示されているように書かれている。形部は最後まで非のうち所のない立派な侍として書かれ、一方小梅九蔵姉弟への語り手の同情は全くない。小梅九蔵は悪人ゆえそれ以外の書かれ方は全くないかのようである。ここでもすべてが自明のこととして明確な書かれ方をしている。読む者はこれでいいのかと省みる事もしない。少くとも初めて第一話、第二話と読んできた読者はそうである。僅かにこの一話は当時の庶民の読者に対して、武士の正しさ、義しさはある意味で空恐ろしいほどのものだと教える効果があったかと考えられるくらいである。しかし読者は、当時としては小梅姉弟のような悪人には情状酌量の余地なぞ全くなかったのだろうと考え直す。長大な時間の重みを感じさせる一篇で、時の流れのうちに堂々と進んでゆく橘山形部とその一族の歴史は、このような立派な侍をたぶらかそうとか背後から討とうとかする卑小な小梅九蔵姉弟の動きなど蹴散らされてしまうことを痛感せざるを得ない。形部についての疑念と小梅九蔵への同情は、間違っても読者に生じることがないように周到に描かれているのだ。

形部が完全に立派な侍と言えるのかとここで問う者はいないだろう。彼はあくまで野沢に固執すべきであった、小梅ごときに「ちょろり」と騙されてしまったのがすべての悲劇のもとではないか、形

部の責任を考えれば大量殺人犯の小梅の処刑は苛酷の度が過ぎはしないか、事柄は確かにその通りだがこの一話では辛うじてそのような疑念が沸くことがおさえられている、そうした書き方と言えるだろう。そうした一話がなぜ巻一の第二に置かれるのか。少なくとも巻一全巻を読み終わらなければ答えられまい。

四

第三の「嗽嗒といふ俄正月」では、後半に出てくる京の太夫みよし野の花のえんの宮越十太郎への恋を読者がどう受け取るかで、一話の意味がすっかり違ってくる。この挿話は主として十太郎、最後には弟亀松の運命を語る主筋とは全く何の関係もない。十太郎はこの女と出逢ったことで精神に何の影響も受けていず、ましてそれが行動に影響するなぞという事は全くない。しかしこれを十太郎の短い生涯の終わりに生じた興味深い挿話と軽く見ることはやはりできないのではないか。作者の意図がそう望んでいないことは確かである。

この女の恋を考えてみよう。女は一目惚れというにはあまりに激しい恋に落ちてしまった。このような事はとくに遊女などには非現実的であると片付けてしまってはならない。むしろ最高位の遊女だからこそあり得て、いくら稀にではあろうとさまざまな条件が整った場合には現実に出現しうるのだと、西鶴は信じていたに違いない。当の女性がそれにふさわしくなければならない。つまらない女だったら全くだめだったろう。それ以外の点ではどんな女か。西鶴が女自身に告白させているところを見るのがよいだろう。

我ながれを立初六年の日数ふるうちに。それにこしらへ置銀が敵の身なれば。貴賤のかぎりもなく逢見し中に。馴染を恋の種となし正しく其御かたの心のかよひ。懐妊せし程の男も今宵はじめての君にくらべて。冨士のけふりと長柄の水底程の思はく違ひ。いかなる縁にや是程いとほしらしき御かたに。あひ参らするもふしぎのひとつ。・・・・・

遊女になってから六年経っているという経歴が重要だろう。あまり年若くてはだめなのだ。なみなみならぬ苦労の半生だったわけだが、この女はその事のためにすれてしまった事も遂になかったらしい。これまで自分でも本当に惚れたと思っていた客もいたという。男女の仲など知り尽くしたこの女にしても十太郎に出遭って雷にうたれたように激しく深い恋心につき落されるまで、世にこんな事がありうるものと思ったこともなった、全く新鮮な体験で、自分でも不思議なのだ。遊女の最高位の太夫だったという設定は一見十太郎の相手としては不自然なようにも思われる。善太夫を討ってすぐに国を逐電すると決意したとき、母親は「壱歩五十肌着の衣裏に縫こみ」とある。たとえ京の叔母の嫁ぎ先「東本願寺のすゑの道場」が豊かだったとしても、またこの世の見おさめの女郎買だったにしてもちょっと贅沢すぎるように思われる。しかし西鶴としてはこのようなほんものの激しく無私な恋愛感情が発生するのは、何か精神的なスケールの大きさを持つ必要があり、それはどうしても太夫でなければあり得ないと信じていたのだろう。

相手の十太郎が間もなく国へ帰って切腹しなければならない人物だという事も重要であろう。もしそういう運命になく、少くともこのような女の目には　悲劇的生涯を背に負っている人物、悲愴の影が否定しようもなくまとわりついている男でなかったら、これ程までにこの太夫の心を動かすことはなかっただろう。この女は一見し

て何かそのような問題を持った男は直観することのできる、そうした女だった。だから十太郎が、「我ら事おぼしめしの外なる身にて都を見しも今晩ばかり。鶏鳴ば東に行て。八月十四日に相果る至極」とうち明けて泣き崩れたとき、「太夫聞になを哀れのまさり。死せ給ひて済事ならば所にかまひは候まじ。いざ自と同じ道にと思ひ切たる気色」ととくに驚いた様子も見せない。このような恋愛は死と直結するから、相手がそう定められていると知った時、すぐに自分もともに死ぬ事を考え、現実に同じ日に女の追腹を実行する。

太夫の激情が十太郎に通じることは遂になかった。「人の詠めを無理共にもらひ。酒おもしろくかはして初會とは思はれず。」と十太郎も最初は楽しみ、太夫の好意を嬉しく思うものの、自分が間もなく死ななければならない身を思うと、それを受け入れることはできない。自分の負っている宿命を語り聞かせると、太夫が驚くこともなく一緒に死ぬ事を決意したとき、十太郎は遂に女の心を理解することはできなかった。この女にとって恋は容易に生命と取り替える事の可能なものだったことが、じきに死ぬ事になっているその男には分からなかった。そこで明日もう一度逢うつもりと約束して相手を辛うじてだまし「おそろしやと立帰り。」とある。この「おそろしや」の一語は最終的な無理解を残酷に示す。十太郎の「おそろしや」の心中語により同日同時刻の二つの死であるにも拘わらず、また太夫は「十太郎を思ひにこがれ」と、恋人への殉死の意味を持った死であるにも拘わらず、完全に二つに切り離されている。十太郎が知らずに無くしてしまったものは大きい。それ故読者はこの二つの死を比較して考えないわけにはいかない。

太夫の死を武士の大義に殉じた十太郎の壮烈な死に比べて、可憐ではあるが私的でなにか不要の死と受け取ってしまえばそれだけだ。だが太夫の死も同じ死であるからには十太郎の死と実は大差ないのではないかと考えてしまったが最後、この死は我々読者の目にどんどん大きくなっていき、ひょっとしてこれこそ本物の死ではないかと感じられ、十太郎の死はその基本にある武士の倫理ともども、次第に相対化され、遂には偽りを多く含むものとなってしまう。

そもそもの十太郎が善太夫を討つという事件は、善太夫の家来が十太郎の弟亀松を侮辱し暴行を加えたという取るに足りない事件を、善太夫がすぐに謝りの使をよこさなかったことに端を発する。善太夫自身は三千石の大身ぶりを意識することがなかったとしても、百五十石の侍たちが、石高の差を相手が意識してこちらを侮る態度を取るのではないかと敏感になっている事実に、あまり注意を払わなかったという事はあるだろう。それが間違いだった。その場面は十太郎が覚悟を決めて善太夫を待ち伏せしていると、「善太夫乗馬ひかせ人あまためしつれきたり。十太郎を見かけて近寄きのふは小者が何とやらといひも果ぬに。其断りおそしとぬきうちにして早業の首尾残る所もなし。」と明確に書かれている。善太夫が昨日の事件を謝ろうとしているのを知りながら抜打にしてしまうというのだ。「其断りおそし」とは恐ろしい言葉である。この悲劇の要因がすべてこめられているかに思える。十太郎は善太夫の方から近寄ってきて、言いわけか謝罪の言葉を述べるのをしまいまでちゃんと聞くことができなかったのか。花山院春林寺の住職のようにこの行為を「扨も手柄」と賞讃することはちょっと出来ない。この書き方は、作者自身読者が十太郎の行為に大きな疑問を抱かざるを得ないように工夫をこらしているかに見える。こうしたことはこの一話を読み終えたあとで、少くとも太夫の見事な自害のさまを読み、十太郎の切腹にある疑念を抱いたあとで否応なく読者に生じるものである。

力は弱いにしても、その種の疑念は他にもある。善太夫の一家が宮腰の屋敷に押し寄せると

表の門をも閉ず。母の親壱人藤縄目の鎧を着て。くれなひの天巻長刀の鞘はづして鞍掛に腰を置て。一命をしまぬ眼色いにしへの巴山吹もかくあらんと。見し人いさぎよくほめて女なればかまはず。

という個所の女親の姿もそうである。決死の覚悟を決めている母親の真剣さを疑う読者はいない。しかし読者はそれを充分に認めた上で、そこに一抹の芝居がかったものが混入しているのを感じる事も出来なくないのではあるまいか。

十太郎が善太夫を討ちに行くとき九才の亀松が袖にすがって自分も連れていってくれと願い涙を流す姿や、宮越の一族いよいよ滅亡かという際になって、これは私の上に起こった事が発端である、兄十太郎の代りに私が切腹する事で済むように取りはからって頂きたいと申し出るなどは感銘深いが、そうであるにしても、侍の一家に出来したこの事件、やはりどこかに一抹の不合理なもの、偽りかも知れぬものの残るのを否定できない。

最後の、十七才十五才に成長した亀松善太郎が遂に野中の一本道で出遭い、一騎打ちの戦いはなやかに相打ちに両名が果てるのも、「花紅葉の色みだれて。さながら化粧軍かとおもはれ」「冬野の薄真紅の糸をみだし。」とあり、本当は鮮血の飛びかう真剣勝負なのに化粧軍、外見だけはなやかな嘘の戦いと見えたというのは、若衆盛りの少年同志の戦いだからそう見えたのだろうが、「大振袖のひるがへるは」とこの事件そのものが発端からほんの小者の乱暴をきっかけとして大事に到ってしまった、いわば化粧軍的な事件ではないかと言うのだろう。

この箇所について西島孜哉氏は、第一の左膳求馬の敵討談、第二の森之丞市丸の敵討談と共に、『武道伝来記』にふさわしいものとなすべく、加筆され、つけ足されたものとする。[2] 恐らくそれは正しい。しかしそうすると、前述（六ページ）のように重要な機能を果たしていた第一第二にも増して、この相討ちに終わる斬り合いが、一話にまことにしっくり適合し、とてもつけ足しなどと感じられないほど重要な一部をなしているのに驚かざるを得ない。これは美しくも無残で空しい二つの死である。八年後のこの後日談で、一話は不思議に懐かしくだが荒寥とした深い陰影を帯びる。この部分の欠けた第三は想像もできない。この一話には、武家倫理への無言の批判と共に、恐らく西鶴に、それに翻弄される登場人物たちへの無言の同情があるのだろう。それは第三で初めて出てきたものである。[3]

ところで、読者のうちには — 西鶴の考えた読者のうちにも — 京の太夫みよし野の花のえんが十太郎に一目で抱いた宿命的で深刻な恋を、遂に理解できない者も多いだろう。滅多にある現象ではないからだ。西鶴は特にまだ世の中を知らぬほんの少女の初恋などと誤って同一視される事のないよう懸命に書いているが、致し方ないだろう。そうした読者はこの太夫の恋と死も、驚異的ではあるが、あまりにも奇嬌と感じ、それだけに一抹の嘘を感じるだろう。だが十太郎の悲愴な死にも同様に嘘を見出さずにはいられないから、両者を等価のものと見なすだろうが、その場合にも太夫の恋と死を描くいわばこの一話の副主題が本主題の侍の倫理を相対化しているのに変わりはない。作者西鶴自身がこのように何段構えもの姿勢でいるように感じられる。ただし正反対に太夫の方が嘘で、十太郎を中心とする武家の倫理と行動が真実だとする見方は、テクストについて作品を読むかぎり出て来る解釈ではない。

この一話の真意をおおよそ右のように取ると、題名にもなった俄正月ということも内容をそれとなく象徴しているように感ぜられる。こうした社会現象はきわめて低俗だから、武士の倫理がいわば俄正

月のようなものとするのは余りに大胆でもあり、作品のテクストも武家倫理、武士の行動が完全にインチキだなどとどこにも言っていないが、意味を示すのではなく、読者に何かそうした気分のようなものを漠然と伝えている事は否定できない。

五

太夫の恋と殉死が書かれたため、十太郎の行動と悲劇的運命が代表する武士の倫理は決定的に相対化されてしまった。十太郎の切腹にしても「流石弓馬の家のほまれを残しぬ。」などといくら讃めてあっても、それは事の半面に過ぎない、半面は不合理で愚劣なのだとここでの大半の読者は諒解する。問題はこうした武家倫理への疑念がこの一話だけにとどまらないという事である。読者は第一第二の二話をふり返り、第一の空恐ろしい程見事な少年達の姿も何か割引きして考えなければなるまいと考え始める。だがそれよりも、第二の記憶されている印象が受ける影響の方が決定的である。「毒薬は箱入の命」を読んでいる間には決して読者の脳裏に浮かぶ事のなかった主人公橘山形部の行動への疑念が生じるのだ。小梅の処刑の残酷さは、完全に正しい処置だったとしても、形部自身の誤ちが小梅の極悪の犯罪を招来した点を考えれば果たしてどうだったかとの思いが萌す。語り手は理想的なほど立派な侍として形部を賞賛し続け橘山の家の繁栄を口をきわめて慶びながらも、作者としては小梅のあのような処刑をちゃんと設定している。読者は語り手の言葉通りに、書かれた出来事を素直に承認し武士の倫理を肯定しながらも、何か些細な暗示があっただけでも直ちに事柄は別の相貌を帯びて見えてくる。第三を読んだあとでは第一第二の武士の倫理の価値自体がぐらつき、根本的に偽りに満ちたものと思える。

ところが西鶴は次の第四「内儀の利発は替た姿」では、一転していくら懐疑的に眺めようとしても否定することが全く不可能な確固たる武士の倫理を示す。これは作者としてすこぶる困難な作業だろう。すっかり懐疑的になってしまった読者に今一度真実の美徳の姿を見せ、感動をさえ呼び起こすとは並大抵のことでは出来ないはずである。それはどのようにして可能となったか。

この一話は冒頭に舞台となった国を明示しない。三十二話中これだけである。姫路という事が分かるのはかなり後になってからである。金塚数馬、照徳寺外記が申し渡した恒例の新年謡初に関する指令の文言から始まる。読者を初めからじかにその現場に立たせ、緊迫感をもって開始され、それはどんどん高まり、権之進が数馬を斬る事件に達するが、権之進、細井金太夫の両主人公はちょっとした拍子に破滅という危機が続くから、読者は場所がどこかなぞ余分な詮索をさしはさむ余裕はない。臨場感は話がこれこそ本物の事件と読む者に痛感させるのにまず必要だった。

数馬を斬った権之進が城中から足袋はだしで駆け出し、屋形町の野はづれでやっと追い付いた家来の草履を借りて履く、という姿はこの一話における作者の態度を示す。このいささかみっともない格好は第一で、為右衛門父子を討った求馬、左膳が家来一同を連れてできるだけ急がずに丹波路に入ったのと対照的である。いくら正義の行動であろうとあまり見事で鮮やかな行為には嘘がある、第四の権之進、金太夫は虚飾の余裕などない切羽つまった危機にあり、そういう場面にこそ真実の美徳が姿を現わすのだと作者は信じている。

藩主の寵臣数馬を斬った権之進の行為と、権之進とその妻子を生命を賭して守り抜こうとする金太夫の行為は、藩主の意志に真向から対立する。それだけを見れば不忠であり武家倫理に背く。ただ藩主に抵抗する家臣を正義とするのはこの時代でも決して珍らしくは

なかったであろう。それにこの一話の冒頭に姿を現わす金塚数馬は、僅かな語句しか費していないのにまことに憎むべき人物として活写され、いかに小身とは言え同じ武家である茶道休林を打擲し、小脇差に手をかけた休林を切り捨てるという悪辣さである。権之進が数馬を斬る行為には私欲も私怨もない、「まったく命をしむにあらず。存ずる子細ありと聲をかけて立のく」という権之進の言葉は深慮の末の行動を暗示している。それよりもここでは藩主の意志への対立は、そのことが当事者に当然もたらす異常な危機という点で重要だったと思われる。正義の士を危機に追いつめる事が、事の真実性を保証する。西鶴はそれを筆力の限りを尽くして描く。

きびしく人をあらためて往還をゆるさず権之進親類の輩にはのこらず屋さがしをすべし。若行方しれずは土をかへして僉儀をとぐべし。年立帰る祝ひの先より曲事をなしけりと。上より御立腹浅からざるも理りなり。

絶対的権力者の怒りほど恐ろしいものはない。右の一文、最初はきびしい公けの処置を言い、次第に直接話法的性格を強めるという西鶴得意の叙法だが、ここでは藩主の憤激の口調さえじかに伝わる。権之進が逃走し残された妻子が金太夫のもとへひそかに隠れたあと、数馬の一族郎党が大勢権之進の屋敷を捜索する時の様子は

中間供部屋にはいまだ此事しらざりけるにや。木枕にあて莨菪をきざみ或は塩をなめて酒を呑。下台所には。朝飯を焼上台所には女あまたの慰業にや。はや乾餅を取散し掻餅霰餅をきざみゐしが。奥御前屋敷出を夢にもしらざりき。おどろき騒て泣出す。姨介抄の人もこは何方へと身をもみて一どに泣出す。

と血相をかえて権之進屋敷に踏み込んだ数馬の家来たちの目から見た屋敷内の様子である。下々の習俗の卑近な日常性が細かく描かれ、正月というので至極のんびりした雰囲気の屋敷の中に突然ふって湧いた大事、とは描かれた場合背景がその大事の真実味を強める。金太夫が妻に事情を語ると妻も「人に情をしらるゝ事かゝる時なるべし。おろそかにならじ」と権之進の妻を「懇情に」いたわり、権之進妻は「嬉しさ限りなく」涙を流し「互の礼義石流やさしく源かりけり」という美しい情景も、極めて人間的である。捜索の手がいよいよのびてきたとき、金太夫の妻が、自分が奉公人の女に変装し、権之進妻をこの家の奥方のように装って難を逃れるのが良かろうと気付き、夫と相談の上変装して里に帰ったという計略は、成功して何とか危機を逃れる事ができた。妻の協力が無かったら破滅は間違いない所である。しかし金太夫の妻は長刀を振るって敵を倒したなどという事ではなく、この計略自体はいかにもつつましい、要するに日常的な性格のものである。だがその重要性は無類である。だから「風俗を使やくの女に作り。真紅の網袋に葉付の密柑を入。長文筥を持そへ奇特頭巾をかぶり。小者もつれず只壱人屋敷を出。はじめて玉鉾の陸地をふみ。」とやゝ詳しく紹介している。権之進の幼い息女に金太夫を父とするように教えたとき「此娘いとかしこくも今ひとりの。髭のあるとゝ様はどこへゆかせ給ふと尋ねられしに。それは伯父様なるぞ我とゝ様は是ぞと。金太夫殿の御ひざの上へ渡す時。」云々にも、幼女の可憐な声、そのいかにもほゝ笑ましい日常的次元のものが、恐ろしい危機と表裏一体をなしている。これらすべてが、危機とそれのもたらす緊張感を、そこに実在するかのように作品中に生み出す。偽りではなくこの第四では真実を書かねばならないと決めたとき、西鶴は空虚な勇猛さなどではなく、もっとしっかり足が地についた人間感あふれる危機をもって真なる事実を表現

しようとした。

危機に際して権之進が普段は決して仲よいわけでもない金太夫を当然のように頼りとした事、誰にとっても不思議なこの選択を当の金太夫自身は驚いた様子もなく「金太夫少しもさはぐ気色なく。」当然の事として受け入れたこと、これは一話の根幹を成す点だがこの点はどうか。金太夫のもとへ忍んで来た弟金右衛門でさえ権之進の妻子をひそかに保護するなど「ひとつは上をかろしむるの恐れ」があり、また普段仲の悪い人の妻子をかくまう理由はないと兄をいさめるではないか。しかし読者は一見理に反するかに見える金太夫の行為をそれ故にこそ承認する。金太夫が弟金右衛門に語る言葉に「武士の意気道理をたつる者は世間の見る目と格別なり。」の一句がある。凡俗の良識などとは別次元の行動規範を二人の侍の精神の高潔さで納得してしまう。それが作者西鶴の意図だった。そして「彼此節我心底を見定め。是非隠しとぐべき者と頼み掛。我に預し女子。たとひ一命にかへても爰は出さぬ至極なり。」という、この覚悟がもたらすものがあの息づまるような緊張、金太夫妻の機転がなければあり得なかった間一髪奇蹟的に回避された危機だった。絵空事ではない危機、それが西鶴の筆によって表現されたとき、この金太夫の決心に権之進の判断、そして二人の友情は真実のものとなる。

数馬を討って逃走した権之進、権之進を助けた金太夫、彼らの行為は「名」のために取った行動ではなかった。それどころか金太夫の行為は正反対に誰にも知られてはならぬひたかくしに隠さねばならぬ行為だった。最後には二人とも名を揚げるがそれは決して予定されていた事ではない。西鶴の時代の読者にとってよりも、現代の読者の方がこの点を高く評価するだろう。しかし西鶴はこの点で当時の読者とは違っていたようだ。真実という事をきわめて厳しく規定している。『武道伝来記』三十二話を精密に読んだあとで結論を下すべきであろう。

大変な危機が一応去った後の叙述も示唆的である。

それより廿日ばかりも過て様子を見あはせわざと雨風さはがしき夜半にしのばせ。第金右衛門を付て権之進隠家吉野の下市と聞えければおくりとゞける武士のやたけ心ぞたのもしき。妻子の対面其悦びいくそばくぞやたとへていはんかたもなし。此度細井殿浅からぬ懇情弓矢の本懐書中に籠。礼義をたゞし。金右衛門は国本姫路にかへりぬ。世に浪人となり敵もつ身の安からぬ事。いまだ男盛の花桜一片の太刀風に今にもふかば散べきと朝暮の心油断なく年月をゝくりける武勇の程こそいさましけれ。

金太夫が遂に権之進妻子を救い得たことが書かれたので、語り手はあの極度に緊張した不安感から解放され、ほっとしたかのように思う存分金太夫、権之進を賛美している。「たのもしき」「いさましけれ」と。西鶴にとっては人目を避け嵐の夜にこっそりと送りとどけるのが真実の「武士のやたけ心」だと読者はもう違和感なく納得する。求馬、左膳の途方もない豪胆さではない。それに読者は主人公たちの危険を強く実感し彼らの運命にすっかり共感させられているから、権之進と妻子が再会できた時、彼らの悦びは「たとへていはんかたもなし」まことに強く実感させられる。その安堵と喜びの気持ちが、さらに次に書かれた権之進の決意にまことに自然に共感せしめる。引用文の最後の一文それだけ取り上げればまことに異様である。「散べき」と決死の覚悟だが不安感は全くない。来るなら来たれという高揚した気分がみなぎる。自分の行動は正義だったと確信し、妻子も今は手許にい、何よりも危機に際し細井金太夫の信義と友情を知った事が、権之進をこういう気分にしてる。『武道伝来記』

三十二話で敵としてねらわれている者がこういう心理状態にある場合は他にない。だが異様ではあっても読者に違和感はない。読者の関心を自在に操る作者の手法に驚く。しかし語り手のみならず作者自身も侍同志の美しい信義友情を書き得たことに満足感を感じそれがあの昂揚感を生んでいるのではないかと我々は判断する。

後日談とも言うべき勝之丞、六十郎の互いに相手を討って自分も討たれて果てたというエピソードには、一見してもはや是が非でも話に真実味を帯びさせようという作者の意欲はなさそうである。考えようによっては、御都合主義も極まれりというべき具合の良い解決である。ただ、あのような権之進の「武勇の程こそいさましけれ」という態度では彼が勝之進に討たれることはあり得ないように思われる。現実にはどうなのか筆者には分かりかねるが、真のレアリスムはむしろ西鶴の方にあるように感じられる。この一話を描ききった筆力の強さがそう感じさせるのだろう。最後の「其後権之進事は。武の本意至極の僉儀に相済て二度帰参して安川の家栄へけり。此時細井金太夫はたらきも世にあらはれ。当家稀なる者弐人と其名をあげて今の世までも語り伝へぬ」も同様である。いわばハッピーエンドだが、読者が特に遺憾に思うことはあるまい。あのような行動を取ったとき、二人には名を揚げるなどという気が全くなかった事は確かだし、作者自身にそうしなければ気がすまないところがあったか。むしろこういう結果にしなければ当時の読者の多数には二人の行為は美徳として承認されにくかったという事もあったろう。

六

以上巻一をふり返ると、作者西鶴がいかに「真実」という事にこだわってきたかが分かる。第一では主人公たちの武勇を単純に肯定し、第二では完全に肯定しながらも、深い疑念にとらわれる寸前のところで読者の意識を引きとどめ、第三では語り手の言葉を借りず遊女の死を置くことで武士の美徳を否応なしに相対化した後、第四では反転して典型的な武士の大義と友情が、人間性に溢れたものとして現実に存在し得る事を示す。この曲折した道のりは、武士による美徳とされる行為が真実であり得るかへの作者の関心を示し、読者を同じ思いにいざなう。この四話それぞれの代わりに三十二話中のいずれか他の一話を持ってくる事ができようとは思われない。またこのように置かれた四話は巻一として一旦見事に終結しながらもその話の方向を先へ先へと進めるものである事も否定できない。例えば巻二の第一は巻一の第四に重ねて、今一度主人公の行動を肯定する。千石取りの大横目という中年の侍同志の大義と友情ではなく、武家の娘による恋人のあだ討ちという、これまた人間的な真実を否定し得ぬ行動である。その後の第二第三第四が、巻三の各話が、ひいては『伝来記』の三十二話の全体が、なぜあの場所に置かれあのような書き方をされているのか。その事をありのままに見てゆくのがまず重要だろう。

注

(1) 『武道伝来記』論　武庫川女子大学紀要　文学部篇　第31集　昭和59年

(2) 　同右　69ページ

(3) 井口洋氏は「続『武道伝来記』試論―相討ちについて―」『叙説』昭和54年10月　で、この化粧軍について考察し、みよし野の花のえんの恋も八年後のこの果たし合い「花軍」も、「その「花」は若くして切腹した十太郎の死を荘厳するために捧げられたものと考えるほかはあるまい。」とし、「それは、国主の公正に違いない裁定によってかえって埋もれてしまった十太郎の生と死を再び掘り起こして、

その「武勇」を主題とする意義を有するであろう。」と言う。（96ページ）興味深い解釈である。筆者には、テキストを離れぬ限り、花のえんの死はやはり無関係としか思えないが、井口氏がこのような解釈に導かれたのは、この八年後の果たし合いが何故か我々の心を強くとらえるからだろう。だから氏の方向は恐らく正しい。今は「作者の批判と同情」という程度にしか言えないが、より綿密な検討を必要とするように思われる。

（未完）

平成九年十一月稿